

吹田市立博物館開館25周年記念
平成29年度(2017年度)
春季特別展

た の むら ちく でん 田能村竹田展

吹田・なにわを愛した文人画家

会期：平成29年(2017)4月29日(土)～6月4日(日)



《吹田村養痾図》 竹田市立歴史資料館蔵

田能村竹田は、江戸時代後期を代表する文人画家のひとりです。安永6年(1777)、豊後国竹田(現在の^{たけた}大分県竹田市)の岡藩医の家に生まれ、22歳で藩校・由学館での勤務を命じられ、同時に豊後国の地誌『豊後国志』の編さんにも携わりました。また、文芸や書画にも興味をもち、20歳頃より儒学者の唐橋君山と、藩絵師の淵野真斎、渡辺蓬島が開いた詩画会に参加し、藩務のために江戸へ向かう道中、大坂や津に寄り、木村兼葭堂など諸国の文人たちとも出会い、詩文や芸術の世界に魅了されていきました。その後、隠居し、天保6年(1835)に亡くなるまで、ほぼ毎年、京坂や九州各地を旅し、各地の文人墨客たちとの交友を深めた竹田ですが、吹田も訪れていたことはご存知でしょうか。天保6年(1835)7月、療養のため吹田に来た竹田は、当地の文人と交流し、《吹田村養痾図》を描き残しました。

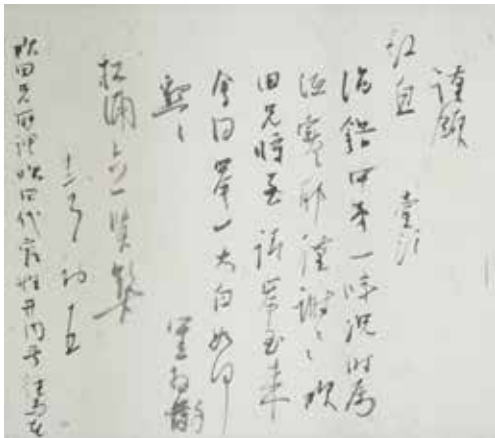
本展覧会では、この《吹田村養痾図》を中心に、天保期の作品を展示し、晩年における吹田、大坂での足取りをたどります。また、漢詩人の頼山陽や文人画家の浦上玉堂といった、大坂を中心に活躍した竹田の朋友たちの作品も紹介します。

(当館学芸員 市村茉莉)

ちくでん 竹田と吹田

天保6年(1835)3月、竹田は同年に刊行した自著『山中人饒舌』の校正及び『近代画史』の刊行作業のため、竹田から大坂へ向かいます。6月には大坂に到着し、大塩平八郎を訪問。そして、7月11日に、井内左門の誘いで吹田村を訪れました。

井内左門とは、吹田村竹中領知行所の代官であり、文芸のみならず医術などにも精通していた人物であったようです。竹田と井内がどのような経緯で知り合ったのかは不明ですが、松浦氏という人物に宛てた書簡に「吹田兄所謂吹田代官姓井内号徑雨者」という一文があります。この書簡は12月5日付のもので、年代は不明ですが、竹田の生没年月が天保6年8月であることから、少なくとも天保5年(1834)には送ったものであり、その頃から井内とも知り合いであったことがわかります。



上) 松浦氏宛の書簡。大阪歴史博物館蔵

吹田村で、竹田は井内宅に滞在していましたが、2人とも気が合ったようで、友人でもあった医者いしの小石元瑞(1784~1849)に「吹田村の朋友」と井内を紹介しています。また、天保6年(1835)閏7月3日に息子の太一に宛てた手紙には、吹田での滞在について記されているほか、「家ごとの蚊遣の煙 立つづき にぎはふ村の夕すずみかな」と、短歌で初秋の吹田村の風景を伝えています。また、神崎川をはじめ、玉江(三島江の別称。「淀の玉江」として多くの和歌に詠まれた)や、長柄(人柱伝説で知られ、与謝蕪村が「やぶ入りや 浪花を出て 長柄川」という句を詠っている)などの名勝が近くにあり、風俗も



左) 忍頂寺静村に贈った《吹田村養病図》。

似た構図で、同じモチーフを描いている。

引用：大分県教育庁管理部文化課『大分県先哲叢書』絵画篇、大分県教育委員会、1992年

田舎風でとても良いと評してもいます。

さらに、「七月末より此地避暑候」と続いており、竹田が吹田へ避暑療養という目的でも訪れていたことがわかります。

このように、吹田村で過ごしていた竹田でしたが、用事で大坂に戻った際、大雨に遭い体調を崩してしまいました。一時は回復するものの、その時食べた浅漬けの茄子が原因でふたたび体調が悪化し、井内宅で療養することとなりました。

今回本展で出陳する《吹田村養病図》は、吹田で療養していた閏7月11日に描かれたものです。画面右中央に家屋があり、その背景には小高い山が配されています。家屋は自身が療養している井内宅でしょうか。周りの風景の描写は一切排され、辺りの静寂さがよく表現されています。右上の款記から、元瑞に贈るべく描いた作品であることがわかります。また、竹田はもう1点《吹田村養病図》を描いており、こちらは吹田村で看病をした弟子の忍頂寺静村に贈呈しています。

井内宅で病床についていた竹田ですが、閏7月20日頃、中之島の岡藩蔵屋敷に移り、郷里より太一が来るのを待ち続けます。そして、8月29日、到着した太一に看取られながらこの世を去りました。

(当館学芸員 市村茉莉)

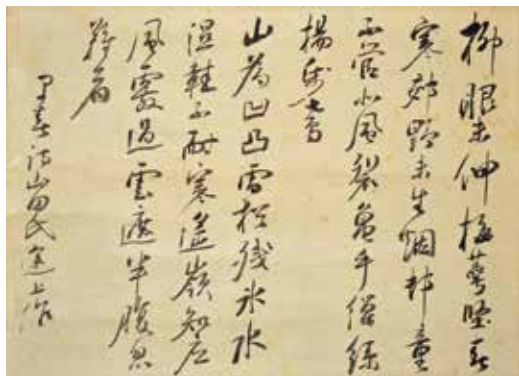
文人の往来

吹田には、田能村竹田^{たのむらちくでん}のほかにも様々な文人たちが訪れています。竹田が去った後、井内は文人画家の金子雪操^{ちくでん}を招き入れ、彼の作画活動を支えます。また、雪操は吹田の人々とも交友し、市内に多くの作品を残しました。さらに明治期になると、竹田の弟子である田能村直入^{たのむらちよくにゅう}が日本画家の富岡鉄斎^{とみおかてっさい}らと日本南画協会を設立し、その支部が吹田に置かれます。その活動のため、直入や鉄斎のほか、その弟子たちが吹田も訪れました。

頼山陽

頼山陽^{らいさんよう}(1781~1832)とは、江戸時代後期の漢詩人・歴史家で、『日本外史』を執筆した人物です。安永9年(1781)に大坂に生まれますが、3歳の時、父の頼春水^{しゅんすい}が広島藩の儒学者として登用されたため、広島に移り、藩の学問所に入ります。幼少より漢詩の才能があり将来を期待されましたが、22歳の時に藩を脱して上洛しますが捕らえられ、自宅に幽閉されます。その後許され、京都に移り居を構えました。京都に拠点に移した後、各地を旅し、その地の文人たちと交友を結んでいます。また、山陽は酒を大変好み、剣菱^{けんびし}の醸造元であった坂上家を訪れる一方、上新田村(現在の豊中市)で薬酒を製造していた山田家^{かみしんでん}にも逗留^{とうりゅう}しています。山陽は山田家を「歳寒堂」と命名し、銘酒を楽しみながら庭に咲く季節の花々を愛でたそうです。

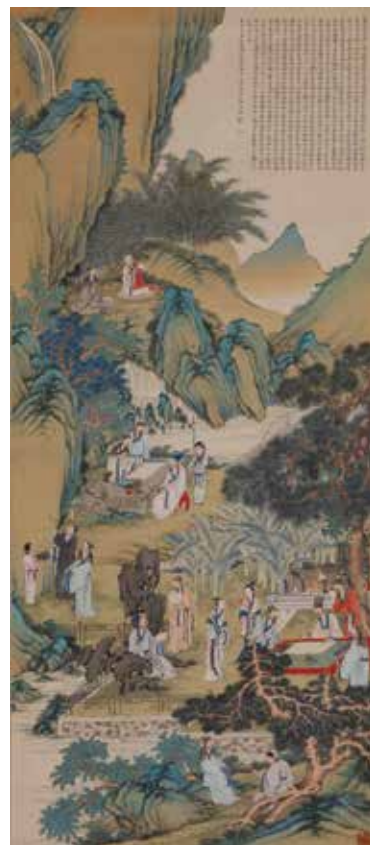
本作品は、山陽が2月に山田家に向かう道中でつくった漢詩で、梅のつばみは固く、山には雪が残り、氷水のため草鞋が濡れてしまうということが書かれており、未だ寒さの厳しい中、朋友に会うべく進む山陽の姿が目浮かびます。



田能村直入

田能村直入^{たのむらちよくにゅう}(1814~1907)は、江戸時代後期から明治時代に活躍した文人画家です。竹田と同じく豊後国竹田に生まれ、文政5年(1822)に竹田の弟子となり、天保期頃より竹田の旅に随行します。天保5年(1834)には、竹田と共に上坂し、大塩平八郎の私塾・洗心洞^{せんしんどう}に入門します。竹田没後、一度は竹田に戻りますが、天保10年(1839)には再び大坂へ行き、竹田と交友のあった文人たちの世話を受け、堺に居を構えます。そして、定期的に竹田の追福会^{ちくふかい}を開催したほか、竹田の遺著の刊行作業もおこないました。その後、明治元年(1868)には京都に移り、京都府画学校(現在の京都市立芸術大学)の設立や、日本南画協会の創立に携わり、後進の育成に尽力しました。

吹田でも明治33年(1900)に南画協会の支部が置かれます。支部設置の記念に、大雄院や高浜神社などで大規模な書画の展覧会が開催され、直入も弟子たちと共に参加しています。支部があった関係か、市内の民家や寺社には直入の作品が多く残されており、この《西園雅集図》^{さいえんがしゅう}もまた、支部長を務めた11代西尾與衛門義成^{よえもんよしなり}が所蔵していた作品です。



左) 頼山陽《漢詩》 個人蔵

右) 田能村直入《西園雅集図》 個人蔵

(当館学芸員 市村茉莉)



平成29年(2017)2月10日、公益財団法人柿衛文庫館長の今井美紀氏にお話をうかがいました。



今井美紀(いまい みき)

大阪大学文学部史学科国史学専攻卒業後、伊丹市立博物館学芸員として開館準備段階より採用され近世部門を担当。柿衛文庫事務局長・副館長を経て2006年4月、館長に就任。2010年3月に伊丹市を退職して専任館長、公益財団法人認定に伴い同常務理事および館長となる。

中牧：伊丹というのはどういう町でしょうか。

今井：江戸時代の伊丹では酒造家を中心として町人が学校を建てています。設置費用や運営費は自分たちで工面するから、学校を造ることを許可してほしいと、領主の近衛家に願い出ました。近衛家はそれを許可して学校の名前「明倫堂」の額を書き与えました。教師については、大坂で漢学塾を開いていた篠崎小竹に紹介してもらい、酒造家の子弟やそこで働く人々を中心に教えました。町衆中心の町らしいわりと自由な校風だったようです。明治になって伊丹市立小学校になると、明倫堂で学んだ人たちがその訓導(先生)に迎えられました。このように伊丹の町は町衆たちがいわば合議制で自治的に町運営をしていました。そうした意味で伊丹は町人の力が発揮されたところがあります。

中牧：柿衛文庫のそもそものいわれは柿から始まったんですが、柿を通した文人墨客の交流のあたりからお話をお願いします。

今井：頼山陽^{らいさんよう}たちは大坂から陸路や水路で伊丹へ遊びに来て、伊丹の町や猪名川、箕面の滝で詩を作ったり、お酒や煎茶を楽しみました。伊丹は、西国街道も通り交通の要衝になっています。元禄・享保期の俳人上島鬼貫^{おにつら}も伊丹の生まれです。上島鬼貫はあえて弟子をもたず、安永・天明期の俳人と謝蕪村^{よさぶそん}が見い出して「鬼貫句集」を編み、顕彰しました。

中牧：田能村竹田もここに来るのを楽しんでいましたね。

今井：重要文化財に指定されている竹田の作品に「稲川舟遊図^{いながわしゅうゆう}」というのがあるんです。稲川は猪名川のことで、伊丹から船に乗って船遊びをするという作品も残っています。

中牧：吹田には中世から吹田氏という国人領主がいて、信長方にいったん滅ぼされているんですが、吹田氏の娘が荒木村重^{あらきむらしげ}の異母弟に嫁いでいるんです。

古代にさかのばれば、行基の活動の舞台でもありました。吹田では行基が堀川を造り布施屋を建てたという記録があります。伊丹では昆陽池^{こや}の開発が行われました。行基や荒木村重で吹田と伊丹はつながり、近世になると文人でつながっています。頼山陽が吹田にも行くし、伊丹にもやってくるみたいにな。

今井：そうですね。地域的な特色がつながるべくしてつながったような感じはしますね。

京都から30石船ですときて、豊中の萱野三平^{かやのさんぺい}と鬼貫が神崎の橋の上で会ったとか会わなかったとか。萱野三平も俳人で、彼の書いた俳句が柿衛にあります。

中牧：今は市町村ごとに分断されていますけれど、近世はもっと入り組んでいた。むしろ文人墨客もそうですけど、いろんな商売なども含めた交流はもっとあった感じがしますね。

今井：箕面まで歩いていくのは大変だろうと思いますが、意外と遠くはない。

篠崎小竹が猪名川を下っていく様子を漢詩「猪名川舟遊七絶」に認めているんです。嵐山から山崎を経て周りの景色をながめながら猪名川を下る。もちろんお酒を楽しんで。

中牧：頼山陽は優雅な紅葉狩りをしましたね。田能村竹田やらみんな一緒になって。それで柿の話になる。箕面の帰りに柿をたべたんですね。

今井：そうです。伊丹の岡田家の柿を食べたんです。

岡田家19代目当主の糠人^{ぬかんど}というご先祖が、山陽らがきたときの岡田家の当主、また元禄かもう少しあとぐらいの7代目当主に酒人^{さかんど}という人もいます。どちらも酒造にかかわる名前です。糠人の還暦を祝って刊行された句集には、まさに文人風に遊んでいるようす、つまり短冊を書いたり、琴を奏したり、碁や将棋をやったり、書を揮毫^{きこう}したり、という文人

の集まりの様子が書いてある。たぶんこんな感じで当時の人々は楽しんだんじゃないかと思います。単に酒宴をひらいているだけではなく、中国の文人を習って楽しんでいたのではないのでしょうか。

この絵を描いたのは岡田家に寄宿していた谷口与鹿^{よろく}という飛騨の匠なんです。伊丹で亡くなって、お墓が造られたんですが、酒壺の形をしています。そこにいろいろ彼のことが書かれた文章が彫ってあるんです。先ほど言った明倫堂に篠崎小竹のもとから派遣されてきた橋本香坡^{こうは}が彼のために銘文を書いて彫ったということです。そのあたりがいろいろつながってくるんですね。

中牧：たしか飛騨の匠はルーツをたどると伊丹に来た渡来人ですよ。

今井：大塚鳩斎^{きゅうさい}は泉川というお酒を造る結構大きな酒造業者だったんですが、そこにも頼山陽は作品を残しています。その主人が亡くなられたときに息子から頼まれて「大塚鳩斎墓碑銘」を書いているのです。

また、山陽は醸造家の白雪さんにも出入りしていて、白雪さんの商標に「白雪」と筆で書いたものがあるんですが、あれは山陽の字なんです。白雪の酒は頼山陽のお母様がお好きだったみたいです。

中牧：男山などの銘柄が他に移った後も白雪だけは残りますね。

今井：岡田家の柿はなかなか栽培がむずかしいらしくて、伊丹市内でも岡田家の庭以外ではあわなかったそうです。もとの柿は枯れたんですけど、それから株わけされた柿を大事に育ててくださった方から、ここの庭に移植させていただいた。それが当文庫で見られる二世の柿です。

中牧：柿にも世代交代があるのですね。

今井：山陽が愛し、竹田が絵を描いた、つまり竹田の絵に山陽が詩をつけた柿をまもる。頼山陽遺愛の柿をまもる、すなわち柿衛ということになります。山陽以来、岡田家当主の号には、柿園とか柿陰とか柿衛とか、柿がついています。

第22代当主の岡田利兵衛先生が、ゆかりの地である伊丹で財団を設立して、資料を寄贈なさった。寄贈された資料で事業をすることになりましたが、その事業運営については伊丹市から補助金をいただいています。また、元々岡田家の土地に、財団の建物を建て、そのあと、他に美術館とか工芸センターとかも増築していき、「柿衛」が伊丹のまちの文化の

中心地として、「文化の郷^{さと}」構想となりました。

ただ、資料がものすごくたくさんあるので、所蔵品もいろいろ見直し、研究し直したらもっとおもしろいことができると思います。

中牧：柿衛文庫は、東京大学附属図書館と天理大学附属天理図書館とならぶ日本3大俳諧コレクションなんですね。

今井：ほかの二つは大学付属の施設なんです。ここは、それより気軽に利用していただけたと思います。だから最初開館したときも、展覧会だけじゃなくて、その資料の活用ということを考えないといけないというんで、閲覧とか講座事業とか研究事業とかにも力をいれてきました。

若い人たちを育成していきたいというのが岡田先生の気持ちだったので、40才未満の新進の俳文学研究者で将来性のある方に差し上げる柿衛賞をつくりました。俳文学徒の目標になっています。俳諧、俳句の研究者が対象で、これまでの受賞者はすべて大学の先生になっています。

中牧：まさに登竜門ですね。

今井：選考委員の先生方の審査もすごく厳しくて、今まで2回ぐらい該当者なしということがありました。もうひとつ鬼貫賞というのがあって、それは句作、すなわち作るほうです。子どもの部門、大人の部門があって、だいたい2万句が集まります。

文化勲章受章の発生物学者岡田節人^{としんど}先生は、岡田利兵衛先生のご次男で、私どもの名誉館長です。

中牧：岡田節人先生はそういう関係だったんですね。知らなかったなあ。

「生命誌」は中村桂子先生の造語ですけど、初代のJT生命誌研究館の館長をされたのが岡田先生です。その方が柿衛と関係があったとは。

今井：理事もしていただいておりますから。伊丹市の名誉市民でもいらっしゃいます。

中牧：国立民族学博物館で岡田先生は運営協議員の役もされていたり、梅棹忠夫先生とすごく親しかったこともあって、私もお世話になりました。岡田先生はすごく先進的な考え方もお持ちで、研究自体も山中伸弥先生のノーベル賞につながるようなことをされているし、発想自体がまさに文人の理学者という感じでした。

本日は貴重なお話、ありがとうございました。

(2017年2月10日)

平成29年度(2017年度)企画展
「未曾有ノ猛台風、襲ヒタル～室戸台風の記録～(仮題)」
会期：平成29年(2017) 6月17日(土)～7月9日(日)

室戸台風は昭和9年(1934)9月21日、高知県室戸岬付近に上陸し、京阪神地域に甚大な被害をもたらしました。強風による建物の倒壊被害などで、実に3,000人もの死者・行方不明者を出したのです。大阪測候所の報告によれば、「午前八時三分ニハ遂に風力計ヲ吹き飛バシタリ。風圧計ニヨリ測定セルニ、風速ノ最大ハ六〇メートルヲ示セリ」とあり、猛威をふるったことがわかります。特に当時は木造の住宅や校舎がほとんどであり、また暴風雨でも子どもたちは学校に行くのが当たり前だと考えられた時代でした。現在のように学校施設が安全地帯の役割を果たすどころか、逆に木造校舎の近くや中は危険だったのです。

現在の吹田市域も大きな被害を受けました。当時豊能郡に属していた豊津を除く吹田市域の惨状を、吹田警察署の『沿革誌』の中の「昭和九年風水害録」は次のように記しています。

岸部村小学校(現在の岸部第一小学校：引用者注)ニ於テハ校舎ノ倒壊ニ依リ、可憐ナル学童四百余名ハ其ノ下敷トナリ、死者二十有八、傷者百以上ヲ出シタル外、味舌村小学校(現在の摂津市立味舌小学校：引用者注)、千里第一小学校、旭マーケット等ノ大建築物倒壊シ、死者実ニ四十有七、傷者二百有余ニ達シタルハ洵(まこと)ニ痛憾ノ極ミナリキ。

大阪府学務課編『大風水害殉職教員美談』(昭和九年10月刊)によると、千里第一尋常小学校(現在の千里第一小学校)は木造2階建て校舎(6教室)が倒壊しましたが、犠牲者は出ませんでした。

この室戸台風による小学校の大惨事として当時全国的にその名を知られたのは、豊津尋常高

等小学校(現在の豊津第一小学校)でした。同校では昭和9年(1934)4月に現在の場所に移築されたばかりの木造2階建て校舎(10教室)が倒壊し、避難しようとした児童51人と教員2人が死亡しました。

このとき、倒壊した校舎の下敷きになりながら5人の児童をかばって命を守り、みずからは圧死した吉岡藤子訓導の話が全国に伝わり、身を捧げて子どもたちの命を救った師道の具現者として同情と称賛の的となりました。当時メディアで大きく取り上げられ、美談・哀話として浪曲や風災記念碑などが作られるなど、多くの国民の同情を誘ったのです。また、横山仁和子訓導も3人の児童をかばって殉職しましたが、昭和9年(1934)8月31日付で同校に着任したばかりの横山訓導の遺体をみた村民たちは、誰だかわからずに先生であることの確認が遅れたため、結果的に吉岡訓導のみが注目される結果になったとも言われています。

本企画展では、豊津第一小学校で保管されている当時の貴重な資料(2教員の肖像画、被災時の新聞記事や写真、浪曲レコードなど)を中心に紹介することで、特に同校における室戸台風の被害をあらためて確認したいと思います。



豊津第一小学校の碑

(当館学芸員 五月女賢司)

平成29年度(2017年度)「さわる月間」 会期：平成29年(2017) 6月17日(土)～7月9日(日)

当館では開館以来、企画展や実験展示などとして実施してきた「さわる展示」を、平成28年度より少しずつ常設化・充実化することになっています。本年度はまず第一弾として、ロビーに当館の初代館長・西村公朝氏が制作した「ふれ愛観音像」や仏像レプリカ、昭和30～40年代の家電製品など「さわる展示物」を配置するとともに、既存の常設展示室においても窯跡の実物大ジオラマへ「入れる展示」を20数年ぶりに再開しました。

このことで、来館された方々の展示室における行動や動線が大きく変化しました。まず、常設展示室1に入る前にロビーの家電やユニット

バスに触れたり入ったりする、特にファミリー層や学校団体の児童が増加したほか、ロビーの「さわる展示」触学後に窯跡に直行する来館者も増えました。それぞれの「さわる展示」における滞留時間も大幅に長くなったほか、「さわる展示」を媒介にした来館者同士の会話も増えました。つまり、これまでの「見る」常設展示に比べて、来館者の記憶に残る展示となっているのではないかと考えています。平成29年度以降も、本年度の経験を常設「さわる展示」の充実化に活かしていきたいと思っています。

(当館学芸員 五月女賢司)

夏季展示実行委員を募集しています

会期：平成29年(2017) 7月22日(土)～8月24日(木)

当館では、平成21年(2009)より市民が自然と環境をテーマとした夏季展示を企画・運営しています。とくに、平成26～28年(2014～2016)は「まもる自然・つくる環境」を共通テーマに展示企画を立てました。

平成26年度「紫金山と釈迦ヶ池 ーまもる自然・つくる環境ー」では、当館の周辺にある紫金山公園と釈迦ヶ池の豊かな自然を残す環境を紹介しました。平成27年度「まもる自然・つくる環境 ーこんなのみつけたよー」では、さらに対象地域を吹田市内全域に広げて、展示しました。とくに「すいたのいきもの」では、生物の食性に注目して展示しました。平成28年度「まもる自然・つくる環境Ⅲ どっちがどっち!? ーちかくの自然をよくみてみようー」では、ハシブトガラスとハシボソガラスのような、身近な生き物で、よく似ているけれど種類が異なるものをとりあげ紹介しました。

自然と環境をテーマとした夏季展示の観覧者やイベント参加者は、幼児から小学校低学年の

子どもの親子連れが多いので、展示やイベントもわかりやすく楽しいものを心懸けています。平成29年度の夏季展示に向けて、1月に市民実行委員会を立ち上げました。都市化された吹田でも、まだまだ自然がのこされていること、のこしていくべきことを伝えるために、「自然の不思議を遊ぼう」をテーマに企画を練っています。

あなたも実行委員会に参加して夏季展示を企画してみませんか。



平成28年度の展示「どっちがどっち!？」

(当館学芸員 池田直子)

旧西尾家住宅と旧中西家住宅からのお知らせ

国指定重要文化財及び国登録記念物の旧西尾家住宅では、4月1日より毎週月曜日が休館日となり、開館時間が午前9時30分～午後4時半となります。また、住宅と庭園の見学にガイドによる解説(午前、午後の各1回、定員各30人)を希望される方は事前の申し込みが必要となります。なお、4月の催しとして、五月人形の展示(4月15日(土)～5月7日(日)、西尾家に伝わる五月人形を展示)と春の大茶会(4月23日(日)午前10時～午後2時(一席500円))が予定されています。



国登録有形文化財及び国登録記念物、市指定有形文化財の旧中西家住宅では春の特別公開が4月1日(土)～9日(日)に、午前10時、午後1時、午後3時に定員各30名で行われます(予約制)。なお、4月に限って、春の特別公開期間以外は庭園のみ公開しています。4月11日(火)～30日(日)の午前10時～12時、午後1時～4時半、定員各30人で事前申し込みが必要です。

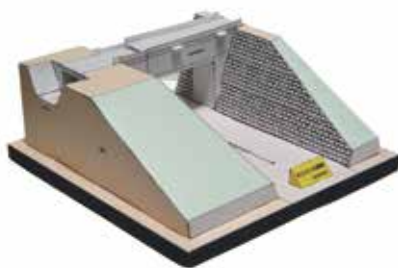
ペーパークラフトで歴史を学ぼう 8

「吹田市立博物館では平成19年(2007)以来、文化財保護の啓発を目的にオリジナルのペーパークラフトを作成しています。これまで28作品を制作しました。今回はこれらの内、NO.26～28の3作品を紹介します。なお、NO.1～25のペーパークラフトは吹田市立博物館のホームページで型紙等を公開しています。



「NO.26 バスオール」

バスオールとは簡易型ユニットバスの一つで、千里ニュータウン内の主に府営住宅の居住者の間で普及しました。本作品は昭和40年(1965)頃に発売開始された型をもとに制作したものです。



「NO.27 旧上の川水路跡」

旧上の川水路跡は近代の土木遺構で、近年まで堤防と水路の一部が残されていました。本作品は大正頃の姿を推定・復元したものです。



「NO.28 吹田市立博物館」

吹田市立博物館は平成4年(1992)11月にオープンした歴史系の博物館です。本作品は本体部分を中心に制作したものです。